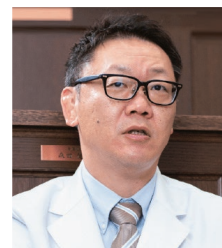


第19回日本統合失調症学会

会 長 金 沢 徹 文 （神経精神医学教室 教授）



2025(令和7)年4月26日(土)・27日(日)の両日、本学看護学部講堂にて第19回日本統合失調症学会を開催いたしました。本学会は、疾患名を冠した希少な学会の一つであり、統合失調症という精神疾患に焦点を当てています。この病気は青年期から20代にかけて約100人に1人が発症するとされ、妄想や幻覚を主症状とする一方、陰性症状と呼ばれる無為自閉に至ることもある極めて重篤な疾患です。患者さんの多くが生涯にわたり抗精神病薬による治療を必要とするため、その影響は非常に大きなものとなります。

私は精神科医としてキャリアをスタートした際、ある患者さんの発症から治療に携わり、その疾患が生涯にわたって患者さんやご家族に及ぼす影響に強い衝撃を受けました。その経験をきっかけに、病因の解明を目指してアメリカやオーストラリアで遺伝子解析を基盤とした研究に従事し、日本では統合失調症の診療ガイドライン作成にも携わってまいりました。統合失調症は、私のキャリアを通じて中心的なテーマであり続けています。

そのような背景の中、今回、学会より大会長の大役を仰せつかり、「種撒く人が集う日」というテーマを掲げて学会を企画しました。このテーマに合わせ、山梨県立美術館から許可をいただき、ジャン・フランソワ・ミレーが描いた名画『種撒く人』をポスター(図1)に使用いたしました。さらに、この学会では様々な企画を通じて新たな視点や学びを提供することを目指しました。

特に注目を集めたのは、統合失調症の姉を撮

The 19th Annual Meeting of Japanese Society of Schizophrenia Research
第19回日本統合失調症学会

種撒く人が集う日
Days when seed sowers gather

2025年4月26日(土)・27日(日)
大阪医科薬科大学
看護学部講堂 他

【会 長】 金 沢 徹 文
大阪医科薬科大学 医学部
総合医学講座 神経精神医学教室

【専務副会長】 西 田 圭 一 郎
大阪医科薬科大学 医学部
総合医学講座 神経精神医学教室

■ 事前参加登録期間：割引価格
【銀行振込】 【クレジットカード決済】
2月5日(水)～3月31日(月)

■ 通常参加登録期間：通常価格
【クレジットカード決済】
4月1日(火)～4月27日(日)

学会への参加登録はこちら
<https://med-gakkai.jp/jssr19/>

特別企画2 トークセッション
「どうすればよかったか?」

4月27日(日) 10:00～11:00
大阪医科薬科大学 看護学部棟 2F 大講義室 (第1会場)

藤野 知明 (監督)
浅野 由美子 (プロデューサー)
金沢 徹文、村井 俊哉

市民公開講座
「チャンスは自分で切り拓くもの」

4月27日(日) 15:00～16:30
大阪医科薬科大学 看護学部棟 2F 大講義室 (第1会場)

司会：金沢 徹文
菊山 裕貴
講演：永島 昭浩

ホームページから
事前にお申し込みください

参加費無料 / 先着 300名

お問い合わせ 主催事務局 大阪医科薬科大学 医学部 総合医学講座 神経精神医学教室 〒569-8686 大阪府高槻市大学2-7
運営事務局 株式会社メッド 〒530-0012 大阪府大阪市北区堂島3-5-14
TEL: 06-4802-6661 FAX: 06-4802-6662 E-mail: jssr@med-gakkai.org
<https://med-gakkai.jp/jssr19/>

図1：学会ポスター



写真1：トークセッションの様子

影したドキュメンタリー映画『どうすればよかったのか』を発表した藤野知明監督をお迎えしてのトークセッションです(写真1)。また、市民公開講座では、元ガンバ大阪でサッカー日本代表として活躍された永島昭浩氏を講師にお迎えし、貴重なお話を伺う機会を設けました。懇親会は、安満遺跡公園内にある「Sundays Bake」にて開催し、ピザを囲みながら参加者同士が和やかに交流を深める場となりました。

本学会の最大の特徴は、統合失調症を患う患者さんやそのご家族を積極的にお招きしている点です。今回の学会には、予想を大きく上回る620名以上の方々にご来場いただき、ほとんどのシンポジウムや企画は満席となり、立ち見の方が出るほどの盛況ぶりでした。患者さんご自身にもシンポジウムでご登壇いただくことで、貴重な体験を共有していただき、聴衆にとっても多くの学びと情報交換の場を提供することができたと考えております。

統合失調症は非常に辛い病気ではありますが、近年ではピアサポーター(統合失調症の当事者が同じ病気となった方の援助者になること)の活躍や法的支援の進展、新薬の大規模治験の計画といった明るい兆しも見えてつあります。「種撒く人」というテーマに込めた思いが実を結ぶ時代が少しでも早く訪れることを願ってやみません。

最後になりましたが、本学会の開催にあたり、多大なるご支援とご協力を賜りました大阪医科薬科大学医師会の皆様に、この場をお借りして深く感謝申し上げます。



写真2：学会終了後の集合写真

第17回日本蘇生科学シンポジウム

会 長 新田 雅彦 (小児科学教室／救急医学教室
医療安全推進室 室長)



2025年7月5日(土)、東京都・虎ノ門ヒルズフォーラムにおいて「第17回 日本蘇生科学シンポジウム(17th J-ReSS)」を開催いたしました。J-ReSSは日本蘇生協議会※1(JRC)が主催し、会員25団体のうち11の理事学会※2が共催する学術集会であり、毎年、関連する学術集会に併設して実施されています。

今回は「第38回 日本小児救急医学会学術集会」(会長：聖マリアンナ医科大学 小児科学講座 清水直樹主任教授)に併設され、また、第38回 学術集会は「第32回 小児集中治療ワークショップ」(大会長：兵庫県立こども病院 小児集中治療センター 黒澤寛史センター長)と合同開催され、3つの集会が同時開催される意義深い学術の場となりました。学会参加数は、J-ReSS単独で46名、併設された学会で1,121名(7月14日現在)となり、多くの方々にご参加いただきました。

J-ReSSの沿革と開催の意義

J-ReSSは、米国心臓協会(AHA)が年次集会に併設して開催するResuscitation Science Symposium(ReSS)を範として、救急蘇生科学の進歩と発展、ならびに蘇生教育の普及を目的に2008年より継続しています。特に本年は、ILCOR(International Liaison Committee On Resuscitation：国際蘇生連絡委員会)※3が2020年以降に公表したCoSTR(Consensus on Science with Treatment Recommendations)に基づき、各国・地域の蘇生ガイドラインが改訂される節目の年にあたり、学術的に極めて重要な開催となりました。

開催プログラム：会長講演・教育講演※4



写真1：会長講演

今回のテーマは「“救命の連鎖”を科学する～予防から恢復まで～」とし、私(新田)が会長講演「“救命の連鎖”への想い～予防から恢復までを見つめて～」を担当し、日本における“救命の連鎖”策定の歴史的経緯と今後の展望について解説いたしました(写真1)。

教育講演では、ソウル大学 新生児科 金漢錫教授(韓国小児科学会理事長、アジアオセアニア周産期学会連盟会長)が「国際ガイドラインに基づく新生児蘇生法の国内標準確立へのあゆみー韓国における取り組み」と題して、少子高齢化や人口集中を背景とした韓国の取り組みをご紹介くださいました。日本にとっても極めて示唆に富む講演でした(写真2)。



写真2：ソウル大学 新生児科 金漢錫教授(写真中央)と

シンポジウム

「JRC蘇生ガイドライン2025改訂に向けて」

9領域(BLS、ALS、PLS、NCPR、Maternal、ECC、NR、FA、EIT)の共同座長および作業部会メンバーが登壇し、公開されているCoSTR

を踏まえ、2025年改訂に向けた展望をご解説いただきました。会場は立ち見が出るほどの盛況であり、関心の高さがうかがえました。

海外招聘講演

午後には、フィラデルフィア小児病院 麻酔集中治療科 Vinay Nadkarni教授を招聘し、「Improving the Chain of Survival for Resuscitation of Children: Through the lens of a ‘looking glass’ and ‘crystal ball’」と題した特別講演を賜りました(写真3、4)。講演では、小児の心停止の予後をいかに改善するかをテーマにお話しいただきました。現在の複雑な医療環境の中、ガイドラインによる治療の標準化によって悪い結果を良い結果に変え、さらに個々の生理学的特性を考慮した治療により、より良い治療結果をもたらすと述べられました。また、Low dose, High frequencyによる教育が大きな効果をもたらすことをエビデンスに基づき解説されました。さらに、今後の医療においてはILCORが提唱する「院内心停止におけるケアの質と転帰を改善させるための10ステップ」※5に基づき、臨床研究から診療の流れの中で質の評価のための



写真3：特別講演



写真4：フィラデルフィア小児病院 麻酔集中治療科 Vinay Nadkarni教授（写真左）

レジストリを活用し、改善を繰り返すことが重要であると強調されました。質の評価における最新のアプローチも紹介され、まさに近未来の日本の医療に示唆を与える講演でした。

パネルディスカッション

午後には2つのパネルディスカッションが行われました。

「国際基準に基づく院内心停止登録システムの構築」

医療安全、救急、集中治療や循環器領域から院内心停止の課題について講演いただき、ディスカッションでは、ウツタイン様式に基づいた院内心停止登録様式の翻訳を行い、その重要性を周知するとともに、データベース化して運用後には誰でも利用可能なオープンデータとし、質の検証を行うことの重要性が認識されました。今後は医療安全分野との連携の必要性が確認され、またJRC代表理事の坂本哲也先生より、会員学会の専門関係者が集う委員会・協議会の設置について前向きな発言をいただきました。

「こどもの蘇生にもう少し関わるために — 大人との同異点 —

小児の蘇生における人工呼吸の重要性や、コロナ禍を経験してのバイスタンダー CPRにおける小児人工呼吸の課題、分娩直後の新生児の圧迫換気比と病態生理的観点からの違い、さらに病院前救護・脳死判定・死因究明における小児と成人の相違について、各領域のエキスパートから解説いただきました。小児蘇生の機会は限られており、小児を日常的に診療する医療者であっても非日常的で混乱を生じやすい一方、救急医にとって蘇生は日常的業務であるものの、小児や家族対応には不慣れであることが指摘されました。そのため、「救命の連鎖」を担う多職種が協力し合う体制の構築と、ガイドライン教育・普及の重要性が強調されました。また、日常診療のみならず研究面においても医療者間の協力が重要であるとされました。

一般演題とJRC Okada Award

一般演題は7題(pre-hospital：1題、ALS：2題、PED：1題、EIT：3題)が発表され、活発な討議が行われました。優秀演題は「JRC Okada Award」として表彰されました。この

「JRC Okada Award」は、初代JRC会長 故・岡田和夫先生の多大なご貢献と業績※6を記念し、ご本人のご意向により、若手研究者の育成と研究推進に資することを目的として第8回J-ReSSより設けられました。本年は、獨協医科大学看護学部 茅島綾氏らの「RQI プログラムを用いた医療従事者による乳児蘇生スキルの長期的効果」が受賞しました。本研究は“low-dose, high-frequency”教育による胸骨圧迫スキルの長期的維持を示したものであり、若手研究者の育成に資する成果となりました。

総括と次回開催

小児領域の学会としては3度目の担当開催でしたが、小児のみならず成人を含め「救命の連鎖」について多角的に議論する機会となり、学術的にも大きな成果を挙げることができました。開催にご協力いただいた関係各位に深く感謝申し上げます。

次回第18回J-ReSSは、2025年10月26～27日に長崎で開催される「第54回 日本救急医学会総会・学術集会」に併設され、長崎大学病院 高度救命救急センター 田崎修先生により引き継がれる予定です。

引用

- ※1: JRC日本蘇生協議会
<https://www.jrc-cpr.org/#>
- ※2: 日本蘇生協議会 参画団体および賛助会員一覧
<https://www.jrc-cpr.org/member/>
- ※3: International Liaison Committee on Resuscitation
<https://www.ilcor.org>
- ※4: 第17回日本蘇生科学シンポジウム プログラム・抄録集
https://macc.jp/temp/17J-ReSS_program.pdf
- ※5: Media Release - Top 10 steps to improve in-hospital cardiac arrest outcomes and care identified: A scientific statement on behalf of the International Liaison Committee on Resuscitation
<https://ilcor.org/news/media-release-top-10-steps-to-improve-in-hospital-cardiac-arrest-outcomes-and-care-identified-a-scientific-statement-on-behalf-of-the-international-liaison-committee-on-resuscitation>
- ※6: 日本蘇生協議会名誉会長岡田和夫先生が逝去されました
<https://www.jrc-cpr.org/2022/11/29/%e6%97%a5%e6%9c%ac%e8%98%87%e7%94%9f%e5%8d%94%e8%ad%b0%e4%bc%9a%e5%90%8d%e8%aa%89%e4%bc%9a%e9%95%b7%e5%b2%a1%e7%94%b0%e5%92%8c%e5%a4%ab%e5%85%88%e7%94%9f%e3%81%8c%e9%80%9d%e5%8e%bb%e3%81%95%e3%82%8c/>



学会終了後の集合写真